

わたしと近代日中学術用語の研究

荒川清秀

日本語と中国語、とりわけ近代語とよばれるものには、字形上共通の漢語がおびただしく存在する。最初はこれらの語の意味と用法の違い、さらには違いが生じたのはなにによるのかということに関心があったが、のち共時的な意味分析だけではものたりなくなり、語史研究へ向かった。その際も関心はこれらの語が日本と中国のどちらで、いかにしてつくられ、さらにどのようにして伝わりあったかということにあった。1987年に「熱帯」日本起源説に疑問をもって以来、地理学用語の研究に取り組んできたが、その成果を1997年に、白帝社から『近代日中学術用語の形成と伝播』として出すことができた。その後、以下のものを書いてきた。

- A) 荒川1998 a 「漢字の意味の歴史性—「盆地考」」『学鏡』95-3丸善
- B) 荒川1998 b 「ことばの行方を追う」『しにか』5月号 大修館書店
- C) 荒川1998 c 「日本漢語の中国語への流入」『日本語学』5月号 明治書院
- D) 荒川1998 d 「ロブシャイト英華字典の訳語の来源をめぐって」『文明21』創刊号 愛知大学国際コミュニケーション学会紀要
- E) 荒川2000 a 「健康の語源をめぐって」『文学語学』第166号
- F) 荒川2000 b 「近代語研究における英華・華英辞典」『辞游File』No.7 辞游社
- G) 荒川2000 c 「外国地名の意識—『劍橋』『牛津』『聖林』『桑港』『文明21』第5号
- H) 荒川2001 「近代中国語成立における日本語語彙の役割」『西洋近代文明と中華世界の変容』所収 京大人文研

Dは荒川1997を補訂するために書いたもので、近代日中訳語の成立におけるロブシャイト字典の影響を過大視することに疑問を呈した。Fは近代語研究における英華・華英辞典の利用を復刻版の紹介をかねて一般向きに書いたもので、この

分野では、これまで那須雅之氏と宮田和子氏それに内田慶市氏ががんばってこれ、那須氏が亡くなって以後は宮田氏が孤軍奮闘している感がある。しかし、これは決して一人でできるようなものではない。ロバート・モリソンから20世紀にかけての英華・華英辞典の総合研究をこの接触研が中心になりとりくむ必要があるのではないか。Fではまた英華・華英辞典を異文化接触の資料としても利用すべきことにふれたが、実際モリソンやロブシャイトの辞典は、語史の資料としてだけでなく、読んでみても面白いものである。

日本語で「盆」といえばトレイのようなもの、それに対し中国語で「盆」といえばボールに近いもの。Aは日中における「盆」の意味の違いにひっかかって、「盆地」はいったいどのような発想から生まれたかを論じたもの。造語のメカニズムを解明することはつねに筆者の関心事で、Bではそれを「化石」に求め、日本人が本来フレーズ（「石に化す」）であるものを語と誤って定着させ、さらにそれを中国へ輸出したという説を提起した。Eでは「健康」が中国語本来の声調の順に並んでいた「康健」を江戸時代にひっくり返してつくったという説を出した。「盆地」が日中での意味の違いから出発したとしたら、「化石」や「健康」は語を文法構造の上から問題にしたものである。

音訳地名は泥沼に入り込む危険性がある。ただ、意識地名は筆者の関心の延長上にあるので、Gでは「牛津」「劍橋」以下がいつ、どこで、どのようなメカニズムによってできたかを追求した。あわせて、oxford から「牛津」をつくる発想はいったい中国人のものなのか、それとも日本人、あるいは西洋人のものであるかを考えた。日本では江戸の蘭学以来、原語の構造に沿った直訳が基本的な翻訳姿勢である。西洋においてもギリシア以来の伝統としてある。それに対し、中国人の発想はbattery（打つもの）から「電池」をつくり、ハッカーを「黑客」とするような、形象的な発想が目立つ。こういう造語における発想法の違いも今後問題にしていきたい。

筆者のもう一つの関心は、CやHで述べたような、中国語へ入った日本語の具体的なさま、中国でも生まれている新語とのせめぎあいを描写することである。ただ、CやHであつかったのは、主に怒濤のような日本語の流入が終わりかけたころの状況であり、この前後を今後さらに追求してみたい。

(2000.9.30)